

# UNIVERSITY CONSORTIUM KYOTO

大学のまち・学生のまち京都で  
つながり、広がる地域連携活動

会報

2022.  
Feb.  
No. 53



特集 1

教員の思い — 教育プログラムをとおして地域に入る —  
花園大学 師 茂樹教授インタビュー

特集 2

地域の思い — 学生と一緒に地域を盛り上げよう —  
勤修おやじの会 × 京都橘大学 げん Kids★応援隊

特集 3

学生の思い  
— 学まちコラボ事業認定団体 わくわく研究室の事例から —



公益財団法人 大学コンソーシアム京都  
The Consortium of Universities in Kyoto

# 教員の思い

## —教育プログラムをとおして地域に入る—

花園大学 師 茂樹教授インタビュー

教育プログラムとしての地域連携活動とは？学生とともに地域に入る活動に長く取り組まれてきた花園大学文学部の師 茂樹教授に、地域と連携した取組に対するお考えを伺いました。



師 茂樹教授と「イザ！カエルキャラバン」で使用されるカエル人形

### 社会で求められていることを自分で考えられる学生を育てたい

受け持たれた学生の地域での活動はどのようにして始まったのでしょうか。

花園大学の建学の精神である「禅的仏教精神による人格の陶冶」にも合致しますが、学生が主体的に活動する場をつくらうと考えたことから始まりました。

2004年頃から「情報歴史学」というコースの授業で、平安時代の貴族の邸宅のCG作成や京町家の復元3DCG作成などを行い、それらが評価されて東近江市からの受託の安土城3DCG作成や京都府との連携による京都市内の地蔵祠の悉皆調査、南区役所からの受託の羅城門と西寺の復元3DCG作成など、次第に地域に入る活動をするようになりました。

学生も評価されると嬉しくなるので、「次は何だ」となるんですね。地蔵祠の悉皆調査は、自治体と連携したことで取組が広がり、住民も参加する「お地蔵さまサミット」の開催につながりました。地蔵祠や提灯が産業として成り立っていることも分かりました。調査は学生が主体的に行い、中京区では町内で聞き込みながら通りという通りをすべて歩きました。過疎化で子どもがいない地域がある一方、いくつかの町が合同で開催し、参加者数が何百名にもなる地蔵盆を開催するところもあります。

次第に区役所との連携も始まりました。右京区役所には地域のいろいろな方が定期的に来る場がありますが、学生も参加をさせてもらっています。こちらから声をかけたり声をかけてもらったりして、さまざまつながりができていきます。区のまちづくり支援事業にも応募して、地域活性化のためのアプリの開発や、京北地域で民話調査をして冊子を作ったりしました。どこと連携していいのかわからない状態からの始まりでしたが、「こんなことがあるよ」という声掛けが増え、他の先生にも広がり、地域との関係性が蓄積されてきたように感じます。

### 課題解決プログラム

花園大学では地域の課題に向き合う「課題解決プログラム」を正課授業でおかれています。このプログラムはいつからあるのでしょうか。

校内では、それぞれの先生の取組を集約し、継続・強化するために、2020年6月に「地域連携教育センター」ができましたが、このプログラムはセンターができる5年程前からあります。地域課題を解決する授業をつくらうという話になり、私が担当することになりました。最初

は受講生も少なかったのですが、途中から安定した数の受講生が参加し、区の支援事業でイベントを実施したり、子ども向けの防災イベントの「イザ！カエルキャラバン」に参加したりしました。面白そうだからと途中から飛び込みで参加する学生もいます。

いろんな学部学科の学生が各々の学びを活用しながら地域の問題を解決する。そうした課題解決を学ぶ機会を増やそうとこのプログラムを作りましたが、毎回学生の構成が変わるという継続性の課題があります。保育士などを目指す学生が多く受講した年は子ども向けのイベントを実施しました。子どものあやしが上手くイベントは盛り上がりましたが、翌年その学生たちはいなくなるんですね。ゼミであればまだ継続性がありますが、この授業は広く浅く学生に機会をもってもらうものと位置づけています。

受講生にひとりも京都出身の学生がおらず、地域の情報がわからない状況から始まった年もありました。通りの名称や距離感も分からないので、地域の課題を発見する以前の状態です。そうした場合は、例えば「防災」であれば、まずハザードマップと地形図を渡し、危なそうなところを見つけてくるフィールドワークをします。すると私でも気づかなかった危ない箇所が見つかるんです。斜めになった電柱や、工場の壁に立てかけられた資材が「地震がきたら倒れますよ」など。地域の見方が変わり、「この店が流行っていないのはなぜか」という話が出たりもしました。だから継続性はなく毎回ゼロからのスタートですが、意義はとてもあるかと思っています。



課題はどのように設定されるのですか。

「今年は防災をやるぞ」「YouTubeを使って動画を作ろう」というように、毎年大枠は決めます。子ども食堂の動画を作成した年は、受講生に子ども食堂を運営するサークルを立ち上げた学生がおり、その学生の提起で取材が決まりました。「こんな授業があるなんて知りませんでした

した」と4回生で初めて受講した学生です。学生間で問題意識を共有し、はじめは子ども食堂がある地域の歴史に焦点をあてようと、日本史を学ぶ学生が調査したりもしていましたが、最終的には学生ボランティアを増やしたい、学生の背中を押す動画にしたいということになりました。そこに至るまでのディスカッションでは非常に濃い話し合いができていたと思います。

そうした学生の試行錯誤を導く工夫としては、ずっとやっていることですが、学生の中に「監督」を決めさせ、判断に迷う時は教員ではなく監督が判断するようにしています。皆を引っ張るリーダーではなく、共同作業の中で最終判断をする係の監督です。動画に使う音楽なども、最終的には監督の判断で方針が決まったりします。協働で活動する方法を考えることも主体的に学んでほしいと思っています。



子ども食堂の紹介動画を作成する様子

## || 継続性がある地域連携活動の事例はありますか。

他の教員の授業ですが、例えば教職課程の授業での取組があります。滋賀県の葛川という地域では、昼間は地域の外に働きに出る人が多く、放課後は子どもだけになってしまいます。普段は学校が開放されますが、夏休みや冬休みは子どもの居場所がなくなるという問題がありました。そこで、「学生ディベロップメントゼミ」というゼミでは、長期休み期間中に教職課程の学生が子どもに関わる活動を継続的に続けており、卒業生もボランティアとして戻って来たりしているようです。

この活動は、教職課程という専門知識を学ぶ学生たちの活動ですが、地域連携というと社会科学系の学部・学科が中心というイメージがあるかもしれません。しかし、一見あまり役に立ちそうにない、文学部で学ぶ歴史や文化の知見で地域課題を解決することもあると思っています。これまでいろいろな地域の方々と交流してきましたが、意外と地域の歴史を知らなかったりします。もちろん、有名な史跡があったり偉人がいたりすると、それに関する人はよく知っている人がおられるんですが、例えば「あそこのトンネルはいつできたんですか？」といった質問だと、誰も答えられなかったりします。地域の発展や課題解決を考える際、大河ドラマに出てくるような歴史だけが大切かというだけでなく、例えば開発や災害で街全体が大きく変わってしまうことで、10年前、20年前の過去すら思い出せなくなってしまいます。そうすると、今ある地域の問題もわかりにくくなってしまいます。そう考えると、文学部で学ぶスキルでも地域にかなり貢献できるのではと思います。

**花園大学地域連携教育センター**

**地域 × 花大 = 無限∞**

ZEN to you&you

**「地域」と「花園大学」をかけたら、  
どうなるのか？どんなことができるのか？  
その可能性は「無限」に広がる！**

花園大学は、地域のみなさまのご縁を大切に、  
自己を知り、他者を受け入れ、社会に貢献する人間を育成します。

check ホームページ [花園大学 地域連携](#)

YouTubeチャンネル [BASE花ここ](#)

このポスターを見た地域の方から問い合わせが来ることも

## 対話をして考えることの大切さ

### || 地域連携活動で大切にされていることを教えてください。

教育プログラムであるからには、地域の方々に、単なるボランティアではないことを理解していただくよう気を付けています。また、最近の学生は昔と違って忙しいので、学生の事情を理解し、受け入れていただくようお願いしています。学生も、地域に入って活動したり、地域の方々と交流したりすると、満足感や達成感を味わいますが、それで終わるのではなく、問題点を見つけ、学びにつなげなければいけません。

「地域課題の解決」とか「地域の活性化」などと言うのは簡単ですが、そもそも何をもって地域課題の「解決」とするのか、何をもって「活性化」というのか……など、その内容は一概に定義できるものではありません。例えば、商店街の通行者数の増加を「活性化」の基準とすると、イベントを開催することで交通量を増やすことはできますし、それによって達成感も味わえるでしょう。でも、そのせいで、イベントをしなければ人が来なくなってしまう場合もあり、結局は商店街が没落してしまうこともありえます。「活性化」とは？「課題解決」とは？といったことをしっかり考えることができる、というのが、学生が地域連携活動で学ぶ一番の大切なことかもしれません。

大切なのは、「なぜだろう」「自分は何をしたいんだろう」と考えること、そして対話すること。地域の方々という、学生とは立場が違う人の話を聞き、相手の言葉に基づいて自分で考えなければいけません。

大学で地域連携活動を経験した学生が、やがて大人になり、どこかの地域で町内会活動をして同じような場面に直面した時に、「そういえばこういうことがあった」「活性化とは何かについて議論した」と授業での経験を思い出してくれたら、と思っています。それでその地域が少しでもよくなるかもしれませんし、近くの大学で地域連携活動やボランティアをやっている学生がいれば、そこと連携しようと思ってくれるかもしれません。そうなったら嬉しいですね。

# 地域の思い—学生と一緒に地域を盛り上げよう—

勤修おやじの会×京都橘大学 「げん Kids」★応援隊

まちづくりになくてはならない地域住民の思い。山科区勤修学区には、子どもたちの笑顔があふれるまちにしたいと奮闘する“おやじ”たちがいます。今回は「勤修おやじの会」の中本貴久会長と、おやじの会とともに地域の子どものはぐくみ育てる京都橘大学の学生サークル「げん Kids」(以下、「げん Kids」という)で2019年12月から2020年12月まで代表を務めた齋藤史佳さんに、お話を伺いました。



「勤修おやじの会」は中本さんが立ち上げたと言いました。立上げの経緯を教えてください。

**中本:** 勤修学区で育った私は、子どもの頃に夏祭りで遊んだことが今でも良い思い出となっています。もともと楽しいことが好きな性格で、「今の子どもたちにも楽しい思い出をつくってほしい」という思いから、母校でもある勤修小学校での夏祭りの再興を企画しました。ところが主催していただける団体がなかなか見つかりません。思案していると他学区の方から『「おやじの会」を立ち上げて夏祭りを主催しては?』とアドバイスをいただきました。当時はおやじの会の存在も知りませんでしたし、まだ子どもがいなかった20代の私にはネーミングにも違和感がありましたが、「自分にできることがあれば」という気持ちで2009年に「勤修おやじの会」を立ち上げ、夏祭りを主催しました。

「地域の夏祭りを開催したい」という気持ちが原動力になったのですね。「げん Kids」とは発足時から一緒に活動されていたのでしょうか。

**中本:** はじめはおやじの会だけでした。会員と京都橘大学の1人の学生の間に交流が生まれたことがきっかけです。若い力に入ってもらいたいとまずは彼に祭りへの参加の声を掛け、彼を通じて大学からサークルを紹介してもらえることを知り、京都橘大学に相談して「げん Kids」を紹介していただきました。



「げん Kids」は子どもとの関わりをメインの活動としたサークルですね。

**齋藤:** はい。「げん Kids」は京都橘大学発達教育学部 児童教育学科の学生によるサークルで、年に5回程度、学内に子どもたちを招いて遊ぶ活動をしています。私が代表をしていた期間には、140名程の学生が在籍していました。おやじの会と一緒に企画運営する夏祭りやキャンプは、私たち「げん Kids」にとっても毎年恒例の一大行事になっています。

**中本:** はじめはおやじの会が主となり運営していましたが、今では運営のほとんどを「げん Kids」に任せています。1,000名規模の夏祭りで、毎年100名を超える学生が運営に携わってくれています。卒業した後も、祭りの開催を聞いて顔を出してくれたりもします。



100名とはすごいですね! 夏祭りの運営にそれほど多くの学生が関わっている地域は他に聞いたことがありません。

**中本:** 他の行政区のまちづくり関係者からも「なんちゅう地域や」と驚かれます。「なぜこれほど学生とつながりを持っているのか」を注目され、取組について報告する機会も増えているんですよ。

「げん Kids」の代表としてキャンプや夏祭りに携わった時の話を聞かせてください。

**齋藤:** 私自身はキャンプを経験したのは1度だけなんです。1回生

の時は台風で、3・4回生の時はコロナ禍で中止を余儀なくされたので。代表を務めていた2回生の時が開催できた経験ですが、子どもの数が多くて焦りました。そんな私の様子を見て、先輩が声のかけ方なんかを教えてくださいました。夏祭りでは、子どもたちが並んでいる間も楽しめるように学生の配置を考えるなどの工夫もしました。「げん Kids」での活動とおして私自身成長できたことを強く感じましたし、将来子どもと関わる職業に就きたいと考えている児童教育学科の学生にとっては実践の場でもあります。



2019年度のキャンプの様子(キャンプファイヤー)

子どもたちとの交流とおして、地域にも子どもにも親近感をもつことができたのではないのでしょうか。

**齋藤:** そうですね。イベントで子どもたちの成長を見てきたので、親近感と同時に今はコロナ禍で苦しむ子どもたちの顔も浮かびます……。なんとか助けてあげたいと考えています。

**中本:** 2020年はコロナ禍の影響でキャンプができなかったので、リモート肝試しと銘打った動画を配信しました。キャンプファイヤーや小学校を舞台にした肝試しなどの従来のキャンプの雰囲気を味わってもらうために、「げん Kids」の皆さんが自ら出演した動画を作成してくれました。

こうした取組には小学校の協力も必須になりますね。

**中本:** おやじの会の立上げは当時の小学校長も切望されていたこともあり、勤修小学校には第1回の夏祭りの開催から継続的に協力していただいています。キャンプのプログラムにある、救急救命や着衣スイミングの訓練では、本来は児童しか入ることができないプールを学びの場としてご提供いただき、「京都橋大学救急救命サークルTURF(ターフ)」(以下、「TURF」という)の学生にも協力してもらって実施しています。

「TURF」も京都橋大学からのご紹介ですか。

**中本:** こちらは「TURF」からでした。地域貢献をしたいという

申し出がご縁の始まりです。「TURF」の学生にはAEDの使用法や心肺蘇生法、川で事故から身を守るための着衣水泳、ペットボトル1本で浮く訓練などもしていただいています。高学年の児童の身体の変化などはおやじたちが関わりにくいところなので、訓練だけでなく年齢の近い学生と話せることは細やかなケアにつながっていると感じています。

子どもをメインとした活動をきっかけに、学生が地域の方とつながる機会も増えてきているのですね。

**中本:** 夏祭りやキャンプをきっかけに、「げん Kids」と「TURF」は地域全体から認識されるようになりました。最近では社会福祉協議会でも敬老行事に子どもを呼ぼうという試みが始まり、体育館では敬老行事を開き、運動場では模擬店を出店したり、「げん Kids」が企画する遊びの実施などを行ったりしています。

**齋藤:** 社会福祉協議会との行事では流しそうめんなどの企画に参加させていただきました。私たちの活動は勤修学区だけでなく、大宅学区などのほかの地域にも広がっています。

**中本:** 活動の幅が広がっても、学生の皆さんの主体的な活動であり続けているところに驚いています。



2019年度のキャンプの様子(交流企画)

おやじの会として目指すものがあれば教えてください。

**中本:** 「勤修おやじの会」は子どもをメインに考えた活動をしていいますが、おやじの会を経験した人たちがネクスト自治連のような形で他の団体に所属することで、より楽しい地域になるのではと考えてます。

個人的には、いつか新十条通を歩行者天国にした、山科区全体を盛り上げるお祭りをしたいという夢がありますが、その時は「げん Kids」も一緒にやってくれますよね?

**齋藤:** はい! 私たちも楽しみにしています。



山科区全体を盛り上げるお祭りを開催する時は「げん Kids」も一緒にやってくれますよね?

はい!楽しみにしています。



# 学生の思い

## —学まちコラボ事業認定団体 わくわく研究室の事例から—

学生は地域連携活動にどのように向き合っているのでしょうか。佛教大学わくわく研究室は、大学・地域連携創造・支援事業(愛称:「学まちコラボ事業」)の認定団体で、ゼミ単位で、子どもをはじめとする地域に向けた子ども科学教室を開催しています。今回はコロナ禍でオンラインの科学教室の動画収録の準備をするわくわく研究室の皆さんをお訪ねし、率直な声を聞かせていただきました。

### || 子ども科学教室とはどのような取組ですか。

教職課程で学ぶ、教育学部(理科教育)のゼミの3・4年生からなるグループで活動しており、2021年度のメンバーは13名。社会貢献活動の一環として、子ども向けに科学を普及促進するために、学生で企画し、運営しています。活動を開始した2016年度から数年は、北野商店街を中心に月1回のペースで主に小学生を対象とした科学実験教室を実施してきました。

昨年度はコロナ禍の影響で活動ができませんでした。キャンパスへの入構は禁止され、授業も原則遠隔、課外活動も制限されました。秋学期に入りやっと先輩から実験の内容を教えてもらい、予備実験を少しやるくらいしかできませんでした。

だから今年はゼロに近い状態からのスタート。活動規制は続いており、大学構内へ子どもたちに来てもらうことも難しいので、新たな活動場所として開拓したのが楽只児童館です。児童館で手伝いをしている知り合いの学生につないでもらい、「子ども科学教室をやりたい!」と持ち掛けたら、「児童館には科学系のクラブがなくて、ちょうど探していた」と快諾してもらえました。

事前に子どもたちとの顔合わせも兼ねて一緒に遊ぶ場を持たせてもらった後、7月に2回実施しました。8月にも予定していましたが、緊急事態宣言の影響で中止になり、現在はオンラインの科学教室の準備をしています。年末にはまた児童館での科学教室を予定しています。



オンラインの動画撮影の様子

### || 地域で活動することについて、これからの思いを聞かせてください。

楽只児童館は、2021年5月にリニューアルしました。紫野小学校との統合に伴い閉校した楽只小学校の跡地にできた複合施設の中に、京都市北いきいき市民活動センターや保育所、人権資料展示施設などと一緒に入っており、地域の人が集まる場所になってきていると思います。コロナ禍の影響で、今はまだ地域の方とあまり関わることができていませんが、こうした人が集まる場所で活動することが、活動の広がりにつながるのではないかと期待しています。

以前は子どもだけでなく、老若男女に向けた科学教室を開いていたと先輩方から聞いています。幅広い世代の人に科学の楽しさを知ってもらいたいです。



2019年度実施の様子



教えて!

ゼミに入った理由

- ・一番子どもと関わることができそうなゼミだったので選びました。
- ・わくわく研究室の活動をしたいと思って選びました。
- ・小学校の先生を目指していますが理科が苦手で、苦手意識をもったまま先生にならないために、少しでも理科を好きになれたらと思い選びました。
- ・言いにくいのですが、入りたいゼミではなかったです。決まったときは「ああ、理科や」と思いましたが(笑)、今は「頑張るしかない!」と思っています。

聞かせて!

ゼミの活動について

- ・人工イクラや Ooho! (触れる水) の実験をした際、参加した子どもが、片付けの時間になってもずっと手に持って楽しそうにしてくれており、やってよかったと思いました。
- ・人前で話す経験ができることは先生になるにあたり、よいと思っています。
- ・実験の手順や、子どもの安全を考えて気をつけることなど、先生になってからも役立つだろうと思います。
- ・保護者や児童館の先生と話す機会は、授業を受けているだけではなかなかないため、勉強になります。
- ・顔合わせで遊んだときから科学教室まで1ヶ月も間が空いたのに、名前を憶えていて呼びかけてくれたことが嬉しかったです。
- ・現在はインターネットなどでいろんな実験の情報が出回っているのでも、「こんなの知っている」と思われるのでは…と不安に思うこともありますが、実際にやってみると子どもたちは時間をかけて何回も繰り返します。その様子を見ると嬉しくなるし、子どもたちから理科の楽しさを学ぶこともあります。
- ・授業だと真面目に話を聞かないようなやんちゃな子が、「うわあすごい!」と喜んで実験する姿を見ると、準備した甲斐があった、やってよかったと思います。
- ・当日に予想もしていなかったことが起きることもあるので、臨機応変に対応する力がつきます。
- ・実験の原理の説明では、小学校低学年の子にわかってもらうためにはどのように説明したらよいか、とても考えます。
- ・安全面の注意もしなければいけない一方で、わくわくする気持ちは無くしてほしくないのでも、その加減が難しい。子どもと関わりながら一番良いラインをみつけていきたいです。

京都の  
地域連携について  
もっと知りたい方は  
こちらを Check!



「がくまちステーション」は、大学と学生と地域とのまちづくりの出会いの場です。  
 京都は大学のまち 学生のまち  
 学生のみなさんには、地域に出て、今まで知らなかった京都の魅力に気づいてほしい。  
 地域のみなさんには、学生の感性を刺激していただき、そのパワーと触れ合ってほしい。  
 そんな思いでできたポータルサイトですので、是非ご活用ください。



**大学**  
 他大学の取組事例の  
 参照先として

**地域**  
 お住まいの地域の  
 まちづくり活動の  
 参考として

**学生**  
 充実した学生生活に  
 するための  
 情報収集として

# Report

## 大学コンソーシアム京都における2021年度事業実施報告

### FD 関連事業

大学教職員のFDに対する意識を高め、大学教育の改善に資することを目的として、1995年から毎年FDフォーラムを開催しています。2020年度開催の「第26回FDフォーラム」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、シンポジウム、分科会、ポスターセッションから情報交換会に至るすべてにおいて、初めてオンラインで開催しました。2022年2月開催予定の2021年度「第27回FDフォーラム」についても、引き続きすべてオンラインで開催します。

FDの基礎知識やシラバス作成、授業設計・実践、アクティブ・ラーニング、成績評価などのスキルの獲得を目的とした少人数制の研修プログラム「FD合同研修プログラム・テーマ別研修（全6回開催）」、所属する大学の枠を超えて、FDに関する様々なテーマについて大学の教職員が交流する場である「京都FD交流会（全3回開催）」も、2021年度はすべてオンライン開催としました。オンラインでの開催を重ねることにより、Zoom機能をうまく活用して、参加者同士の活発な交流も可能となりました。



FDフォーラム 情報交換会の様子

教学IRのさらなる普及、定着に寄与する場とすることを目的とし、株式会社リアセックと共催している「IRフォーラム」も、2020年度に引き続き、オンラインで開催しました。2021年度は、募集人数を前年度の500名から、1,000名に拡大したことにより、加盟校・非加盟校ともに参加者が増加し、本フォーラムへの関心の高さがうかがえる結果となりました。

### SD 関連事業

SD分野で関心の高まっているテーマを取り上げ、大学職員の能力向上や、大学の枠を超えた情報交流の場を提供することを目的として実施している「SDフォーラム」は、2020年度に引き続き、2021年度もオンラインで開催しました。また、昨年度は講演のみの実施でしたが、基調講演と2つの分科会を設け、実施しました。参加者数は昨年度より下回りましたが、大学が抱える時宜に合った内容が、参加者の満足度を高める結果となりました。



SD共同研修プログラムの様子

「SD共同研修プログラム」は、大学職員に対して、広い知見と高度な専門知識に加えて、大学を超えた情報交換やネットワークづくりの機会を得る場として、2019年度までは対面で開催していましたが、コロナ禍により、2020年度はすべてオンライン開催とし、2021年度は全8プログラムのうち、1つのプログラムを除き、すべてオンライン開催としました。

### 高大連携事業

高大連携事業は、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、大学コンソーシアム京都による「京都高大連携研究協議会」と連携し、推進しています。

「高大連携教育フォーラム」では、探究的な学びに焦点を当て、高校、大学が立場を超えてともに考え、探究的な学びの可能性を探る機会として、開催しました。2020年度に引き続き、オンラインでの開催にもかかわらず、全国から多数の高校・大学の教職員に参加していただきました。



高大連携未来セッションの様子

「高大連携未来セッション」は、2020年度に引き続き、京都府内の高校生、大学生による実行委員が企画・運営を担い、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。参加者の多くは、対面での参加を希望し、対面交流の重要性や喜びを感じる企画となりました。

「京都高校教員交流会」は、2021年度で4年目を迎え、高校と大学コンソーシアム京都が、より発展した関係性を築いていけるよう、高校教員にも企画立案に参画していただき、高校のニーズに添った交流会を目指し、実施しました。

## 京都学生祭典事業

京都学生祭典は、学生の手で京都を盛り上げようと学生実行委員会が主体となって、2003年から毎年10月に平安神宮・岡崎公園一帯（京都市左京区）において、おどろや音楽などが繰り広げられる一大イベントです。19回目となった2021年度は、昨今の社会情勢に鑑み、平安神宮前ステージで披露した「京炎そでふれ！」の演舞や「Kyoto Student Music Award」の演奏など、学生の手による様々なパフォーマンスをYouTubeで視聴する「視聴型企画」と、岡崎グラウンドに会場を移して参加する「来場型企画」の2種類によるハイブリッド形式の祭典になりました。

本祭当日のステージ企画は、感染防止対策を徹底したうえで、無観客形式で行いました。無観客とはいえ来賓をお招きして学生パフォーマンスを披露したことや、小規模とはいえ来場型企画を実施したことは、学生祭典を継承していくうえで、極めて貴重な機会になりました。



京都学生祭典の様子

## 京都国際学生映画祭事業

京都国際学生映画祭は、学生実行委員が運営する日本最大級の国際学生映画祭です。国内外問わず、広く学生監督らの映画・映画作品をコンペ形式で募集・選考を行い、京都国際学生映画祭で上映することで、京都から若き才能の発掘と映画文化の発信、映画人材の国際交流を目的としています。

本祭に先立ち、映画祭の告知を兼ねたイベントとして、キャンパスプラザ京都にてバリアフリー上映会・トークショーを開催しました。また、今後、京都大学医学部附属病院での映像配信も予定しています。

2022年2月に開催する第24回目となる京都国際学生映画祭は、京都文化博物館フィルムシアターでの開催とオンラインでの配信の2形式を予定し、準備を進めています。



バリアフリー上映会・トークショーの様子

## 障がい学生支援事業

障がい学生支援事業では、障がい学生支援を担当する教職員を対象とする意見交換・研修の場の創出や、聴覚障がい学生に対する支援（情報保障のスキル向上等）を目的として、「関西障がい学生支援担当者懇談会」（KSSK）をはじめ、「ノートテイク・パソコンテイク養成講座」、「テーマ別研修会」、「高大連携懇談会」に取り組んでいます。



パソコンテイク養成講座の様子

2021年度のこれらの事業はオンラインを中心に開催しています。また、インターネットの環境等の事情により、オンラインでの参加が難しいといった声に対しては、キャンパスプラザ京都を会場としてオンライン参加できるようサポートを行っています。オンラインで開催することにより、距離的・時間的な制約からこれまで参加することが難しかった方の参加も多くあり、オンライン開催のメリットを実感する一方で、教職員がざっくばらんに交流する場の創出が課題となっています。

# 大学コンソーシアム京都における2021年度事業実施報告

## 単位互換海外留学派遣プログラム（国際連携事業：学生の海外留学・交流促進事業）

オーストラリア・ビクトリア州の大学連携体との協定を活用し、京都ならではの単位互換科目として、メルボルンにある大学附属語学学校への短期留学プログラムを実施しています。大学の枠を超えて、京都地域の大学生の誰もが参加可能な、4週間の英語による留学プログラムです。

本プログラムは、4つの大学附属語学学校から自分の好みに合った学校を選択し、ホームステイをしながら質の高い英語学習を受け、現地での様々な生活体験ができるのが特徴でしたが、2020年度はコロナ禍のため急遽「オンライン留学（2大学から選択制）」に切り替えざるを得ず、結果的に実施するに至りませんでした。

2021年度もオーストラリアへの渡航が困難な状況は変わらず「オンライン留学」としてご案内することとなりましたが、昨年度に比べオンライン留学のメリットが一定の認知を得られ始めていること、本プログラムの説明会やオリエンテーションの段階から、現地語学学校関係者と楽しくコミュニケーションできるよう工夫したことも奏功し、本プログラム初のオンライン留学派遣を実施する予定です。

アフターコロナにおいてオンライン留学がどのような役割を担っていくのかは分かりませんが、コロナ禍を契機として実施し、得られた知見を、本プログラムの充実・発展につなげていければと考えています。



オリエンテーション（オンライン）の様子



留学イメージ（渡航留学時）

## 留学生と地域活動団体等の交流機会創出（留学生誘致・支援事業：留学生スタディ京都ネットワーク）

国際事業部を事務局とする「留学生スタディ京都ネットワーク」では、国内外への効率的・効果的なプロモーションによる「留学先としての京都」の認知度・ブランド力を高めることで、海外・国内からの京都留学（進学）の促進につなげるとともに、加盟校の留学生誘致活動等の支援や、京都で学ぶ留学生に対する、留学生・日本人学生・地域との交流促進、就業支援など受入環境を整備することで京都における留學生生活の満足度向上に向けた支援に取り組んでいます。

ネットワークでは、2019年度から留学生と地域活動団体等の交流機会創出に取り組んでいますが、2020年度はコロナ禍のため、具体的な取組を見送らざるを得ませんでした。2021年度も厳しい状況が続きましたが、感染状況が落ち着いた時期を捉え2年ぶりに留学生と地域との交流イベントを対面にて開催することができました。

今回は、京都府南丹広域振興局、森の京都地域振興社（森の京都DMO）、京丹波町竹野地域（竹野活性化委員会）の御協力を得て『『京丹波黒豆の学校』『田舎に触れて考える～農村地域の人たちとの交流の集い～』』と題し、畑での京丹波黒豆の葉取り作業や茹で豆と豆ご飯の試食などの文化体験に加え、地元が直面する4つの課題（高齢者の移動、移住・定住、農業振興、6次産業創出）を地元住民と考えるワークショップを行い、学びに集中できる田舎に日本語学校をつくるという留学生からの提案に地元の方が関心を示されるなど、受入地域にも還元できる密度の濃い交流を行うことができました。（参加留学生19名、竹野活性化委員会メンバー10名、地元在住大学生1名）

感染対策を徹底したうえで実施したため、参加留学生には様々なルールを守ってもらいながらの交流となりましたが、普段なかなかできない体験でもあり、楽しげに地元の方と話している姿が印象的で、コロナ禍にあってもネットワークに期待されている学校の枠を超えた留学生と地域との交流機会を提供することができたのではないかと考えています。



京丹波黒豆の葉とり体験の様子



地元の方とのワークショップの様子

## 留学生対象インターンシップ（留学生誘致・支援事業：留学生スタディ京都ネットワーク）

留学生スタディ京都ネットワークでは就業支援の一環として留学生に特化したインターンシップを実施しており、これまで是有給型のインターンシップのみ実施してきましたが、受入企業・団体の拡充を図るため2021年度から有給型と日本では一般的ないわゆる無給型のインターンシップを併用して実施することとしました。

2020年度はコロナ禍の影響もあり非常に小さな規模となりましたが、2021年度は無給型インターンシップを取り入れた効果もあってか、15の企業・団体に26名の留学生を受け入れていただきコロナ禍前の規模に回復するとともに、受入企業・団体の業種の幅も広がり、留学生にとってはインターンシップの機会が増えただけでなく、インターンシップ先の選択肢も広がることとなりました。



インターンシップ就業の様子

留学生の就職活動状況に関する民間調査においても、インターンシップ参加経験が日本人学生の約半分の割合、就職活動開始の動き出しも遅い傾向があるとされており、留学生に特化したインターンシップの果たす役割は大きいと考えています。コロナ禍の先行きが不透明な中、企業にとっては厳しい環境が続くことも想定されますが、引き続き、留学生に少しでも多くのインターンシップ就業の場を提供していきたいと考えています。

## インターンシップ事業

2020年度に新型コロナウイルス感染拡大を受け「全プログラム中止」という判断を余儀なくされたことを踏まえ、2021年度は、どのような状況下でもプログラムを中止せず継続させることを第一に、Zoomを中心としたオンラインシステムの積極活用を計画段階から盛り込みました。その結果、5月に行なった約360名の出願者へのWEB面接を皮切りに、感染拡大下においてもプログラムを進め、全225名（ビジネスコース・パブリックコース206名、長期プロジェクトコース19名）の学生が修了しました。

5箇月に渡って受入先の課題に取り組む「長期プロジェクトコース」（2021年度受講生22名）では、対面による講義およびチーム活動実施を基本としつつ、感染症の再拡大時にはZoomへと臨機応変に切り替え、各プロジェクト活動に最後まで取り組みました。11月に対面で開催した報告会では、活気あるプレゼンテーションが行われました。

充実した講義と10日間～1箇月程度の就業体験実習を行なう「ビジネスコース・パブリックコース」では、受講生全員に対する全体講義およびゼミクラスごとの事前・事後講義をすべてZoomで行いました。受入先において主に8～9月に予定されていた実習の一部が、感染症の再拡大時に取りやめとなったケースも発生しましたが、実習方法の変更を含む感染対策にご協力いただき、多くの受入先において実習をご継続いただきました。

受講生たちは試行錯誤しながらインターンシップに取り組み、制限された厳しい状況下だったからこそ貴重な経験を手にすることができました。



長期プロジェクトコース報告会の様子

## 単位互換事業

2021年度に加盟大学・短期大学から提供された345科目中、オンラインシステムの活用を前提として開講された科目が99科目（全科目中28.7%）あり、内46科目（同13.3%）は「オンラインのみ」で授業が実施されました。その結果、2021年度の延べ履修許可者数870名中、「オンラインのみ」で実施された科目の受講者は280名（全延べ履修許可者数中32.4%）にのびりました。

学生にとって他の大学へ授業を受けに行くことは、「魅力」とともに、時間や費用面における「負担」も感じるものです。今年度、オンライン授業を受講した学生のアンケートには、「自大学の授業の合間に、他大学の授業を受けられてよかった」「交通費をかけずにオンライン出席でき、先生と質疑応答することもできた」といった声が寄せられました。他方で「他大学の授業を受けている実感が薄かった」といった声もありました。

大学コンソーシアム京都では2021年度から、所定の基準を満たしたうえでオンライン形式にて開講・提供される科目を推奨し、支援しています。今後、より多くの魅力的な科目が各大学から提供され、学生たちの学びがさらに拡充していくことが期待されます。

# Report

## 大学コンソーシアム京都における2021年度事業実施報告

### 地域連携事業

地域と連携した実践的な教育プログラムの開発・実施に取り組む大学を支援する「学まち連携大学」促進事業。本事業の採択校の取組紹介を中心に、大学・学生・地域で、学生の地域連携活動について考える「大学・地域連携シンポジウム」を11月6日に開催しました。

テーマは「地域連携活動の醍醐味」。第1部では、採択校である花園大学、京都光華女子大学、龍谷大学、京都橘大学のそれぞれから、学生が地域と連携して活動した具体的な取組事例をご紹介いただいたほか、地域の方と対話して声を聞くことの大切さや、意識を持った専門職を生むためには地域の課題を体感することが大切であるといったお考えも聞かせていただきました。第2部のトークセッションでは、地域住民や地域で活動する学生も登壇者に加わり、サークル活動で主体的に地域課題の解決に取り組む学生に対して、教員から賞賛の声がかけられる場面も。

オンラインと来場の両方に対応する形式で開催したことから、京都だけでなく全国からたくさんの参加申し込みがあり、アンケートの回答や会場の質問からは、参加者にとって意義ある内容であったことがうかがえました。



トークセッションの様子

### 都市政策事業（京都から発信する政策研究交流大会）

京都から発信する政策研究交流大会は、学生が日ごろの研究や学習成果の発表の場として互いに交流を深め、都市政策に活かすことを目的に開催する大会です。12月19日（日）、第17回となる大会を開催しました。コロナ禍の影響から、昨年度に引き続きオンライン開催となりましたが、大会には約100件のエントリーがあり、当日は、72組・457名の発表者が9分科会に分かれて互いに発表し、その様子はYouTubeライブで配信されました。分科会の終了後、発表者は学生実行委員が企画した学生企画である、フィードバック交流会とトークセッションに参加し、交流を深めました。

迎えた受賞者発表では、大学コンソーシアム京都理事長賞、日本公共政策学会賞のほか、10の優秀賞とベスト質問賞が発表され、画面越しからも受賞者の喜びが感じられる時間となりました。大学コンソーシアム京都理事長賞の受賞は、京都女子大学の学生による発表「鴨川沿い行政看板の分かりやすさに関する研究－日本人と外国人の比較調査を基に提言－」。日本公共政策学会賞の受賞は、同志社大学の学生による発表「日常使いとしての着物－着物会議習慣による着物産業復興への手がかり－」。受賞者の発表はもちろんのこと、大会参加者の研究発表は広く発信し、大会の意義を深めてまいりたいと思います。



分科会の様子



受賞者発表の様子

## 大学間連携による新型コロナワクチン接種

7月から9月にかけて、加盟校間の連携を活かしたスキーム「大学間連携による新型コロナワクチン接種」を実施し、接種を希望した、14校の加盟校の学生・教職員ら2,917名が接種を受けました。

2021年6月、全国各地で新型コロナワクチン接種が開始される中、大学を拠点とする職域接種が進められることとなり、多くの大学が職域接種の実施申請をされました。申請には「接種会場、医療従事者及び会場スタッフなどを大学自ら確保すること」、「同一会場で2回接種を完了し、1,000人程度以上の接種を行うこと」などの要件があり、申請が困難な加盟校も多くあったことから、「同じ京都で学ぶ学生間で接種環境に差が生じることを避けるべき」という視点をもって、このワクチン接種を実施しました。このことにより、すべての加盟校の学生等が希望すればワクチンを接種できる環境を整えることができました。

接種は、京都大学の協力により、京都大学医学部附属病院において、7月18日から9月5日までの土曜日、日曜日に行われました。実施にあたっては、財団が京都大学と本事業での接種希望加盟校との連絡・調整役となり、取りまとめや当日の運営支援などを行い、接種希望加盟校との連携体制をとって無事に実施することができました。

## 第18回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム

9月11日、財団が事務局を務める全国大学コンソーシアム協議会が主催する全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムが、コロナ禍の影響による2020年度の中止を経て2年ぶりに開催されました。

全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムは、高等教育の発展に資するべく、各大学コンソーシアムの取組や研究成果等の情報交換を目的とされています。

第18回は「大学コンソーシアムの再考と再興～ニューノーマル時代に大学コンソーシアムが切り拓く可能性とは～」をメインテーマに、初の全面オンライン（Zoom）開催。全国から476名の大学教職員や教育関係者等が参加し、基調講演及び分科会における事例報告や意見交換を通じ、あらためて「大学コンソーシアム」の在り方について考える場となりました。



## インターンシップ実習生の受入れ

8月、財団が実施するインターンシップ事業（ビジネスコース・パブリックコース）のプログラムに参加した4名の学生を財団でも実習生として受入れました。実習期間は2週間。教育事業部での実習と、調査・広報事業部での実習の2組に分かれて行いました。

教育事業部においては、京カレッジの受講生などへのインタビュー・記事作成、単位互換制度PR動画ラフ作成を、調査・広報事業部においては、学生向けの「大学コンソーシアム京都 活用ガイド」の作成を担っていただきました。両事業部で実習生が作成した成果物は、実際に財団で活用しています。

実習生を受け入れることで、実習プログラムをつくる難しさなど、受け入れ側の立場を体感することもできましたので、今後のインターンシップ事業の改善につなげていけそうです。

京都のミュージアムが学びのフィールド

# 京都ミュージアム PBL科目の魅力を紹介!

大学コンソーシアム京都の前身「京都・大学センター」が発足した1994年から運用している単位互換制度。2020年度には「京都ミュージアム PBL 科目」が新設されたことをご存知でしょうか。授業を取材し、その魅力についてご紹介します。

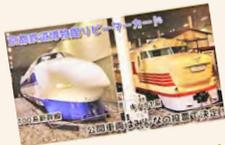
## そもそも 京都ミュージアム PBL 科目って?

京都ミュージアム PBL 科目は、各大学と京都市、大学コンソーシアム京都が協働で2020年度から開設しています。文化都市京都の利点を活かし、京都に集まる多様な博物館（ミュージアム）をフィールドに京都の魅力ある文化を学びながら、そこにある様々な課題に取り組むことでチームワークを活かし、課題解決に向けたリーダーシップを発揮できる人材を育てる、課題解決型の授業です。

# 01

## 京都鉄道博物館 × 立命館大学

サービス・マネジメントの視点から考える博物館施設の魅力向上  
～どのようにしてリピーターを獲得していくのかを考える～



### 授業レポート

この日は京都鉄道博物館のご協力のもと、学生が企画・作成した大人用と子ども用の2種類のオリジナルカード（アンケート機能付）を来館者に配り、アンケートへの回答を呼び掛けていました。受講生は限られた時間で趣旨を伝えることの難しさを感じながら、声のかけ方やカードの渡し方を工夫します。また、館内で撮影した写真にハッシュタグをつけて SNS に投稿すると、オリジナルポストカードがもらえる「SNS 企画」も考案し、企画参加を促すために、手書きのボードを手に館内を回りました。



### 学生のコメント

- 「鉄道が好き」「自分の大学では体験できない、新しいことをやってみたい」など、同じ気持ちを持つ他大学の受講生から良い刺激を受けています。京都ならではのフィールドばかりなので、どれかに「ピン」ときた方には受講をおすすめします。（京都経済短期大学 1 回生）
- 平日に必修授業が多いため、土曜日に取り組むことができるプロジェクトを受講しました。この企画は、職員の方のアドバイスで練り直し、2～3箇月かけてやっと実現しました。大変なことも多いですが、やりがいのある授業です。（京都外国語大学 3 回生）



担当教員  
近藤宏一（立命館大学）

本授業では、はじめにマーケティングの理論を学び、その後、京都鉄道博物館から提示された課題に沿って受講生の自主的な提案を活かしながら授業を進めます。意外かもしれませんが、鉄道好きの学生ばかりが集まるわけではないんです。1年ごとに学生や課題が変わることで取り組む内容が変化するのは、この授業の特徴でありおもしろいところかと思えます。受講生は博物館の職員の方から厳しいご意見をいただくこともありますが、それも本プログラムを深くご理解いただいているからこそ。何事にも自主的に取り組む学生の受講を期待します。

# 02

## 京都市京セラ美術館 × 大谷大学

京都市京セラ美術館をプロデュースする



Photo: Koroda Takeru

### 授業レポート

3班に分かれた受講生から京都市京セラ美術館職員の方に最終プレゼンを行う様子取材しました。「京都市京セラ美術館の魅力・価値を高める」ために企画立案した、「白い壁をスクリーンとして活用する」「『描くと撮る』で美術館を知る」「チケットの半券を『キリトリフレーム』として活用する」という提案に職員の方からは、「どれもやってみたい」とお褒めの言葉。その後いただいたアドバイスを基に最終報告会に向けてさらに磨きをかけていました。



### 学生のコメント

- 高校生の時から「単位互換制度」に関心があり、京都の大学に進学したいと思っていました。博物館学課程を履修しているので、美術館で学べることは何よりの魅力です。回生や学部の違いから学びの共有が難しい時もありましたが、自分と異なる視点からの意見を聞くことができるなど、単位互換ならではの面白さを実感しました。（京都女子大学 4回生）
- 「京都の大学生」でいられる最後の年に、「経営学部での学びを美術分野に活かすことができれば」と思い受講しました。この授業をとおして、回生にかかわらずグループの中で一人ひとりの力をどのように活かしてゆくのが大切だと気付きました。座学だけに留まらないミュージアムでの学びは、代えがたい経験になりますよ！（京都先端科学大学 4回生）



担当教員  
宮崎健司（大谷大学）

2021年度の授業では、4回生や博物館学課程の学生が参加し、1回生の学生たちをうまく導いてくれました。「この授業で美術館に初めて来た」という学生からは広報関係の提案が多く、文化財を専門にしている私には思いもよらない提案がなされることも。そうした他大学や他学部の学生と共に学ぶ経験は、受講生にとって何よりの学びとなります。今後も博物館学課程を履修する学生や美術に関心の強い学生が多く参加することで、より高度な研究に発展することを期待しています。



多様なミュージアムは他にも！

# 03

## 京都国際マンガミュージアム × 京都精華大学



# 04

## 京都市動物園 × 同志社大学



2022年度の開講内容の情報・詳細は  
右のQRコードからご確認ください！

大学コンソーシアム京都  
**単位互換制度**  
2022



<https://consortiumkyoto-tanigokan.jp/>

# Information

## 京カレッジ 働く世代に向けたリカレント教育プログラムの始動！

働きながら学ぼうとする現役世代を中心とした多様な年齢層に対する学びの機会の提供と実現をめざし、2022年度からリカレント教育プログラムの講座を開講します。

2022年度は、データサイエンスの基本を学ぶことができる「働く人のためのデータサイエンス講座」と有人宇宙学の最先端の知見を学ぶことができる「現代の教養講座『宇宙移住の現在・未来について』」の2講座です（申込期間：2022年3月4日（金）～3月17日（木））。

講座の詳細やお申し込み方法については、当財団京カレッジのホームページをご参照ください。



2022年度リカレント教育プログラムに関する情報はこちらから

<https://www.consortium.or.jp/project/sg/details>

## 京都留学生ショートムービーコンテスト受賞作品が決定しました！

国際事業部が事務局を務める「留学生スタディ京都ネットワーク」では、京都地域で学ぶ留学生を誘致するため、京都留学の魅力をPRしています。その中の取組として、京都で学ぶ留学生や元留学生が作った、京都留学の魅力を伝えるショートムービーのコンテストを行いました。

京都留学の魅力いっぱいの留学生ショートムービーを是非ご覧ください。



### ▼ 2020年度受賞作品

最優秀賞	「Full-time father, full-time student」 Eko Heru Prasetyo (京都大学)
優秀賞	「手紙～拝啓 京都ちゃんへ」 付 詩画 (京進ランゲージアカデミー京都中央校)
審査員特別賞 (3作品)	・「THE BOOK OF MEMORY (京都の思い出の本)」 Nguyen Manh Minh Toan (京都大学) ・「私にとって、京都は「学び」のまちだ。」 金随攻 (同志社大学) ・「STUDY IN KYOTO」 NGUYEN NGOC MY (京都工芸繊維大学)
学生賞	「猫と京都、夢中の奇遇」 オウセン (京都芸術大学・京都先端科学大学)
観客賞	「Full-time father, full-time student」 Eko Heru Prasetyo (京都大学)【重複】

2020年度  
受賞作品はこちら！



### ▼ 2021年度受賞作品

最優秀賞	「KYOTO CAN」 NGUYEN NGOC MY (京都工芸繊維大学)
優秀賞	「Once in a Lifetime」 Matthew T. Kamiyama (京都大学)
審査員特別賞 (3作品)	・「KYOTO DRIFT-Mama chari」 Giorgia Serpani (京都大学・京都外国語大学) ・「My Wabi-Sabi」 AISYAH TRI ASTARI (京都大学) ・「Kyoto is」 LandArch Studio (京都大学)
学生賞	「KYOTO CAN」 NGUYEN NGOC MY (京都工芸繊維大学)【重複】
観客賞	「KYOTO DRIFT-Mama chari」 Giorgia Serpani (京都大学・京都外国語大学)【重複】

2021年度  
受賞作品はこちら！



〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下 キャンパスプラザ京都内  
TEL : 075-353-9100 (代表)  
FAX : 075-353-9101  
E-mail : pr-ml@consortium.or.jp  
WEB サイト : <https://www.consortium.or.jp/>

